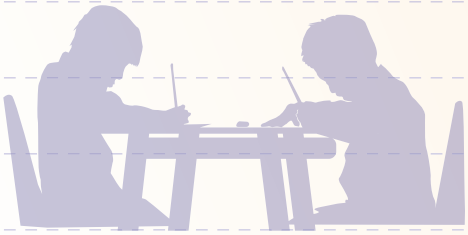
特集

「小6 統一合判」3
中学入試レポート vol.

どうなる2020年入試？

最新の人気動向から探る
入試予測と併願校選びのポイント

6年生の統一合判テストもこれで3回目。大勢の仲間が集まって力を競う、こうしたテストの雰囲気や形式に、ようやく慣れてきた受験生も多いと思う。来年2月の入試本番まで残り5か月足らず。いよいよこれからが、入試に即した実戦的な力を身につける段階だ。一方で保護者の皆さんは、わが子の受験校を固めていく時期になった。そこで今回は、この9月までに見えてきた人気動向を踏まえて、来春2020年の入試状況をできる範囲で予想しながら、併願校選びのポイントをお伝えしていこう。



首都圏模試センター

来春2020年入試の受験者総数は、6年続きで増加へ向かう可能性大！

今春2019年入試が終わった2月以降、夏休みまでに各私立中学校で行われた学校説明会やオープンスクール、複数の私立中による合同相談会･説明会などの参加状況を聞き及ぶと、ほとんどの機会で参加者数が前年度よりも増えているという。この動きを見る限り、来春2020年首都圏中学入試の受験者数は、6年続きで増加する可能性が大きくなった。

その背景には、今春まで5年続きで中学受験者数が増加に向かった理由である「2020年大学入試改革」の動きが、より多くの小学生の保護者に知られるようになった状況がある。

いよいよ現在の高校2年生が最初の当事者というところまで差し迫ったことで、これから小学校を卒業する子どもたちの保護者が、そうした今後の「入試と教育の変化」を、より強く意識するようになっていることは間違いない。

そうしたなかで、すでに夏休み前までに、来春2020年入試に向けた各校の入試改革・学校改革の動きが数多く伝えられている。

本郷が2021年から、豊島岡女子学園が2022年から「高校募集を停止」する動きからは、私立中高一貫校があらためて中高一貫体制を強め、自校の教育をさらに進化･発展させようとする意図が感じ取れる。

公立中高一貫校の動きとしても、東京都立の併設型中高一貫校5校（両国･大泉･富士･武蔵･白鷗）が2021年～2022年にかけて、すべて「高校募集を停止」し、中学募集数を拡大する（いわば完全中高一貫化）動きや、茨城県の県立トップ高校がいずれも2020年～2022年にかけて、中学校を開校するという動きが、首都圏における「中高6年間一貫教育への期待と注目」を、さらに高めることになる（すでに茨城県ではこれらの公立中高一貫校の新設に向けて、多くの小学生と保護者による、新たな「中学受験ブーム」が起こっていると聞く）。

一方、この3～4年、中学入試のトピックとして目立ってきた「私立中入試の多様化」はさらに加速し､「適性検査型入試」をはじめ､「英語入試」や「思考力入試」などの、いわゆる「新タイプ入試」の実施校がさらに増加することも確実だ。

豊島岡女子学園は2022年から高校募集を停止。完全中高一貫体制になることが注目されている！

最難関校への強気のチャレンジ傾向は、今春に続き来春2020年入試でも続く。大学付属校はまた人気増加傾向へ！

今春2019年入試では、男子校では麻布、駒場東邦、武蔵、栄光学園、筑波大附属駒場、海城、本郷、浅野、女子校では女子学院･雙葉･フェリス女学院、鷗友学園女子、吉祥女子、立教女学院、横浜雙葉、浦和明の星女子、共学校では渋谷幕張の女子、早実、東邦大東邦など、最難関～準難関に位置する学校の多くが志願者を増やした。その一方で、男子･女子の最難関に位置する開成、桜蔭の志願者もほぼ前年と変わらず維持された。

つまり、2～3年かけて進学塾で4科目をしっかり勉強してきた成績上位生の多くが、高い目標に向けて強気でチャレンジしていく傾向が見られたことになる。増加した入試機会や､新設された午後入試、あるいは「算数1科目入試」に象徴される得意科目選択入試などを上手く併願に組み込む一方で、それらをステップに最難関校へ強気でチャレンジしていく受験生が増えているということだ。来春2020年入試でも、おそらくこの傾向は引き継がれること

になるだろう。

一方で、今春2019年入試でも、慶應義塾大学、早稲田大学をはじめ、GMARCH6大学、東洋大学、東海大学など有名大学の付属中学校の多くが志願者を増加させた。明治大学付属中野や東洋大学京北などの大人気が、そうした傾向を象徴している。「2020年大学入試改革（2021年1月～）」を2年後に控え、中学受験時から大学付属校を好む傾向が、今年も目立ったといえるだろう。

この「大学付属校人気」は、この2～3年続いてきた傾向でもあるが、来春2020年入試でも引き続き同様の傾向が見られることが予想される。

一見すると矛盾するような上記二つの傾向ではあるが、現在の中学受験生と保護者の多様な志向と、「日本の教育と入試」の大きな変化の節目に、わが子の進路をめぐって揺れ動く保護者の気持ちを反映したものともいえるだろう。

今春の「算数1科入試」トレンドに続き多様な「得意科目選択型入試」実施校がさらに増加へ！

前回7月の小6「統一合判」入試レポートでも、6月上旬までに判明した各校の入試改革（入試要項変更）や「新タイプ入試」の新設、学校改革などの情報をお伝えしたが、その後も続々と、来春2020年入試に向けての動きが公表されつつある。

全体として見ると、来春2020年入試では2月2日が日曜日にあたる（プチ・サンデーショック）ため、その日を避けて2月3日に入試日を移動する青山学院をはじめとしたプロテスタント校が入試日を前後に移動することが、ひとつの大きな動きとしてある。同じくプロテスタント系の東洋英和女学院はB日程を元の2月3日に戻し、恵泉女学園は2月2日の第2回入試を、午前から午後に移動し、入試科目も4科から2科・4科選択に変更する。こうした動きが、これらの学校と近隣で人気競合する学校にも影響し、さらに入試日変更などを誘発するケースも出てくるだろう。

今春2019年入試では、男女ともかなりの人気校が、「午後入試の新設」に踏み切ったことが話題を呼んだが、来春2020年入試でも「午後入試の新設や増設」の動きは、「算数1科目入試」や「英語入試」の増設を中心に、さらに増加傾向にある。従来の4科目入試を2月3日から2月2日に移し、2月3日には2科目による午後入試を新設する暁星の人気動向などは大いに注目される。

また、やはり最近の入試のトレンドともいえる「得意科目選択（重視）型」の入試は、さらにバリエーションを増やしている。

この1～2年の間に増加した「算数1科入試」は、来春2020年入試でも、湘南白百合学園〈2/1PM〉、田園調布学園〈2/1PM〉、富士見〈2/2PM〉、啓明学園〈2/1PM〉などで新設される。

こうした「得意科目選択型」入試が増えていることは、受験生と保護者から見れば、自身（わが子）の強みや得意科目を生かして、上手な学校選びと受験作戦（＝併願作戦）を立てることさえできれば、こうした激しい変化のなかに、合格へのチャンスが広がっているということになる。

たとえば「算数が飛びぬけて得意」な受験生にとっては「算数1科目入試」は、その強みを生かせる機会となり、「国語が得意」な受験生にとっては、「国・算どちらか1科目選択」入試や「国語重視型」入試がひとつのチャンスとなる。

そして、ユニークな「新タイプ入試」としては、自ら「日本一入試の種類が多い学校」と明言する

本郷は2021年からの高校募集停止にともない、来春2020年から中学募集の定員を増やす！

宝仙学園共学部理数インターが、来春は「読書プレゼン入試」を2月1日と4日の午後に新設。山脇学園は2月2日午後に「探究サイエンス入試」を新設する。神奈川でも清泉女学院が2月5日に「思考力·表現力·総合力」を測る「アカデミックポテンシャル入試」を新設。聖和学院は、「プログラミング入試（プログラミングと簡単な英語インタビュー）」を新設する。

また、前回7月の入試レポートでも、国学院久我山の「STクラス入試」の増設や、大妻多摩の「国際進学クラス」新設、桜美林の高校「国公立コース」新設にともなう「特別進学コース」「進学コース」の3コース制となるなどの動きをお伝えしたように、その他にも、国本女子の「DD（ダブルディプロマ）コース」と「LA（リベラルアーツ）コース」新設や、鎌倉女子大学中等部の「国際教養コース」と「プログレスコース」の新設、昭和学院の「IA（インターナショナルアカデミー）コース」、「AA（アドバンストアカデミー）コース」、「GA（ジェネラルアカデミー）コース」の新設など、学内のコース再編や新設の動きにともない、それぞれのコースにふさわしい入試形態が導入されることにも注目しておきたい。

わが子の7年先の大学入試にもつながる「適性検査型入試」にも注目を！

なお、現在の小6受験生に直接影響する動きではないが、お茶の水女子大学附属中が、現在の小5受験生が中学入試に挑む2021年から、従来の4科入試を変更し、「入学検定：検査Ⅰ、検査Ⅱ、検査Ⅲ」を導入することを昨年から公表していることにも注目したい。

宝仙学園共学部理数インターは、来春2020年入試では「読書プレゼン入試」というユニークな新タイプ入試を新設する！

公立中高一貫校の「適性検査」の出題形式は、2017年5月に文科省が公表した、現在の「大学入試センター試験」に代わる2020年度からの「大学入学共通テスト」のサンプル問題と酷似していた。一方、国の教育研究機関であり教育実習校でもある国立大学附属中のなかには、すでに中学入試の試験科目を、従来の4科目から「適性検査」に変更した学校も出てきている（東京大学附属中など）。

つまり、今後（2020年度以降）の新たな大学入試では、公立中高一貫校の「適性検査」的な出題がベースになり、そのうえで各大学の「個別入試」では、多様な尺度で受験生の力が試されるということになる。そうした大学入試の変化とそこに向かう教育の変化が、中学入試にも、すでに反映し始めていると考えておくべきだろう。

そうした時代の変化を反映して、私立中の入試にも、公立中高一貫校をめざしてきた小学生にとっても受験（併願）しやすい「適性検査型入試」という新たなタイプの入試が、すでに首都圏の半数近くの私立中で導入されるまでになっている。

そして、「適性検査型入試」以外にも、「総合型入試」や「合科型論述入試」、さらには「思考力入試」、「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」、「プログラミング入試」などのユニークな新タイプ入試が増えている背景には、それらの個性的な入試が、従来の4科·2科の筆記試験で測られるものとは違った尺度で、小学生の潜在的な能力や資質を評価するものであり、同時にこの先の大学の個別入試のあり方を反映したものであることは、すでに多くの私立中高の先生方をはじめ、教育・受験関係者の間での共通認識になりつつある。

したがって、今後の中学入試を受験するすべての小学生にとって、こうした公立中高一貫校と国立大学附属中の「適性検査」や、私立中の「適性検

査型入試」に取り組んでいくことは、自分自身が7年先に迎える大学入試にもつながる学びになるということなのだ。

従来の4科目･2科目の入試のなかにも意図的に「思考力」を問う出題が増加。

こうした私立中の入試改革･学校改革に加え、入試形態の多様化の動きが加速していることは、ちょうど来春2020年の中学受験生（＝現在の小学校6年生）が、「2020年大学入試改革」から6年目の2025年大学入試に挑んでいく学年であることにも関係している。

2020年からは、新たな大学入試制度への対応を前提とした次期『学習指導要領』が導入される。さらに新たな「大学入学共通テスト」では、当初4年間「現状のマークシート式の英語入試と民間英語検定の併用」とされた英語の入試が、2024年度からは民間英語検定のスコアが全面的に導入される。その節目となるのが、現在の中学1年生が直面する「第2期入試改革」といわれる2024年度の大学入試。その本格的に「大学入試が変わる」翌年が、現在の小学校6年生が大学入試に挑む年だ。

来春2020年の中学入試に挑む受験生の世代が、そうした大きな変化の節目にあることから、中学入試の世界も大きな変化を見せている。それが、この2～3年の中学入試のトピックとして度々伝えられてきた「入試の多様化」傾向だ。

「総合型入試」の新設から11年目を迎える光塩女子学院は、その入試の手応えを十分に感じているという！（写真は2018年11月3日に行われた「新入試体験！私立中コラボフェスタ」での体験講座の様子）

また、そうした「新タイプ入試」の導入には踏み切らない私立中であっても、従来の4科目や2科目の入試問題のなかに、「意図的に（今後の大学入試と同じように）『思考力･判断力･表現力を問う』出題を入れてくるケースが増加している。

だとすると、中学受験生と保護者側も、こうした各私立中が出題に込めた“メッセージ”をしっかりと受け止め、そうした出題に対応できるような力を身につけておく必要があるということになる。

私立中の「新タイプ入試」はさらに増加！大学入試の変化を中学入試が先取り。

その後もそうした「新タイプ入試」の新設は続々と公表され、最終的には今春2019年入試から20～30校は増加することが予想される。

今春2019年から新設された相模女子大学中等部〈神奈川･相模原市。女子校〉の「プログラミング入試」や、湘南学園〈神奈川･藤沢市。共学校〉の「湘南学園ESD入試」など、これまでは比較的こうした動きが少なかった神奈川エリアの私立中にも、各校が中高で実践する教育プログラムにつながるユニークな「新タイプ入試」が続々と登場しつつあることは「中学入試の変化（＝多様化）」が、首都圏全域に広がったことを意味している。

そうした「新タイプ入試」を導入する各私学が意図するところは、4科目･2科目入試に限らない「新たな評価軸の発見」にあると言っても良い。

そして、そうした新たな評価軸を見出し、子ども（入学してくる生徒）たちの素質や能力に光を当て、さらに中高6年間で、その力を伸ばしていく教育ができれば、今後大きく変化する大学入試にも十分に対応していけるという考えを、それらの進歩的な私学は持っている。

公立中高一貫校を志望してきた小学生ならば、私立中の「適性検査型入試」を、本番前の力試しやトレーニングとして事前に受験することで「適性検査」本番に向けて役立てることができる。教科をまたい

2020年入試を勝ち抜く「併願作戦」を立てるヒント
～“合格”を引き寄せる5つのポイント～

ここでは、来春2020年入試で合格をつかむための「ベストな併願作戦を組み立てる」ためのヒントを紹介しておこう。以下は第一志望校だけではなく、すべての併願校を選んでいくためにも重要なことにほかならない。だからこそ、これから受験校選びをしていくうえで、あらためて意識すべきポイントとして参考にしていただきたい。

（1）入試本番では少なくとも6校（6回）以上に出願し、合格を得るまで「受け抜く」覚悟を固める。
→今春2019年入試での「一人平均出願校数」は6.7校。実際に中学受験にチャレンジした先輩たちが、それだけ出願しているという経験則を役立てたい。

（2）上記（1）のことを実行するために、少なくとも10校以上の学校を見学する。
→実際に見学する学校は多いほど良い。なかには最初から受験する学校を絞り込んでいる家庭もあるが、実際に足を運んで、私立中の現在の教育内容や環境、成果を知ることで、初めて「通える範囲にこんなに良い私立中があったんだ！」と気がつくケースも毎年非常に多いのである。

7月7日(日)に実施された「統一合判」の東洋大学京北中会場では、600名以上の保護者が熱心に最新入試情報や、首都圏模試センターの「思考コード」の説明に聞き入っていた。

（3）親子で「これだけは譲れない」という学校選択の条件を絞り、それ以外は柔軟に受験校を選ぶ。第2志望校以下は「親の責任で」選び、併願校に加える。
→各家庭で、保護者が大切にしたい価値観や教育方針と、受験生本人が望む（本人に合った）校風や環境の両方を備えた学校を探したい。ただ、万が一のときのために考えておく併願校については、保護者の柔軟な判断と見識で選んでいくべきだろう。

（4）併願校の難易度を上下幅広く選び、慎重かつ強気の組み合わせを考える。
→難易度として「横一線」になるような併願校の選び方は避けるべき。第1志望校へは思い切ってチャレンジしても良いが、一方ではしっかりと「押さえ」になる学校も選んでおく必要がある。

（5）どんな状態、コンディションでも、親子で「最後まで明るく」受験に挑む気持ちで。
→やはり入試本番では強い気持ちが合格へのカギになる。もし序盤で1校や2校不合格になったとしても、決してくじけてはいけない。最後まで明るく受け抜いた親子は、ほとんどが実りある合格を手にしていると考えておきたい。

だ合科型の出題や、記述式の出題を得意とする受験生ならば「総合型入試」や「合科型論述入試」を受ければ、自分の強みを生かせる。

知識の量は多少不足していたとしても、与えられた課題について、問題中に提供された情報や知識を生かし、その場で考え、自分の言葉で表現することが得意な受験生ならば、「思考力入試」にチャレンジしても良いだろう。

スポーツ、芸術などの習い事や、自分の関心のある事についての研究などに打ち込んできた小学生ならば、この1～2年で少しずつ導入校が増えてきた「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」を受けてみることをお勧めしたい。

そして、急速に増加してきた「英語入試」は、2年後に迫った「2020年大学入試改革」を節目に、今後大きく変わっていく大学入試とのつながりを象徴するものでもある。幼少時から英語学習を続けてきた小学生や、英語学習への意欲やモチベーションを持つ小学生ならば、一度は受験してみると良いだろう。

広く知られているように、今春2019年入試から、慶應義塾湘南藤沢中等部〈神奈川･藤沢市。共学校〉が「国･算･英」の3科目による英語（選択）入試を導入した。これをきっかけに、神奈川県内の他の私立中や、首都圏の大学付属校全体に「英語入試」導入の流れが広がっていく可能性がある。

そういう意味で、最近の中学入試は「英語でも受験できる」時代になったといえるだろう。

そして、これらの様々な「新タイプ入試」は、中学入試の世界に多様な評価軸をもたらすことになった。そういう意味で、今後の新たな大学入試に先駆

「統一合判模試」の志望校は、“できるだけ多く”登録することが合格への秘訣！

～2018年度から変わった登録システムを生かして、1校でも多くの入試の合格可能性を探ろう～

この「統一合判模試」を受験するにあたっては、合格判定の対象にする志望校を各自に選んでいただいている。この「志望校登録」システムは、一昨年までは「一人最大8校」まで選んで登録することができたが、2018年度からは、実質的にさらに多くの学校（最大6校）を志望校登録して、それぞれの学校について最大15回の入試まで合格判定の結果を見ることが可能になった。

実際の入試本番でも、一人7校近く出願しているわけだから、その7校を選ぶためには、事前にもっと多くの学校を検討しておく必要がある。そのための志望校登録システムの変更なので、その機能を十分に役立てていただくと良いだろう。

（1）第1志望校（＝チャレンジ校）を複数選び、合格の可能性を比較して探る。

→この9月までに第1志望校が固まっている受験生も多いと思うが、もし他にもチャレンジしたい学校（入試）があるならば、そうした学校も志望校登録をして、合格の可能性を探ってみることが、受験勉強の励みにもなる。

（2）第2志望校（＝実力相応校）も複数選び、どのような併願作戦がベストかを探っていく。

→受験生によっては、第1志望校（＝チャレンジ校）、第2志望校（＝実力相応校）、押さえ校（＝滑り止め校）の組み合わせの校数が違ってくるし、それで良い。ただ、第1志望校に続く併願校を選び出すことの方が、実際にはかえって難しい。それらの学校への合格可能性は、何度でも何校でもしっかりと探っておきたい。

志望校登録

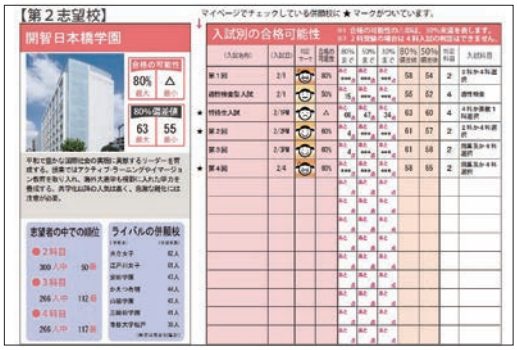
（3）押さえ校（＝滑り止め校）も複数選び、万が一の場合にも心配ないベストの併願作戦を組み立てる。

→これも第2志望校（＝実力相応校）と同様ではあるが、受験生本人にとってベストな併願校を慎重に探っておきたい。合格の可能性が高いと判定されたり、志望校内の順位が高ければ、それが本人にとっての励みや自信にもなることは当然のことだ。

（4）併願校の難易度を上下幅広く選び、慎重かつ強気の組み合わせを考える。

→前のページのコラムと同様。多くの志望校を登録し、合格判定結果を受け止めることで、第1志望校（＝チャレンジ校）について、「目標（合格）までの距離や課題」を知るための参考にできる。一方で他の併願校については、合格判定結果を、その時点で受験生本人が「ここまでは大丈夫！」と思えるような、自信や励みにつながるように活用すべきだ。

そのためにも、志望校（併願校）登録は「1校でも多く登録（記入）する」ことが、実は合格を勝ち取るための、意外なコツになっているということを強調しておきたい。



「統一合判模試」の合格判定では、最大６校まで選べる志望校について、それぞれ最大 15 回の入試まで結果が見られるので「できだけ多くの志望校（入試）を登録する」ことが合格への手がかりになる！

けて“変化”、“多様化”し、その方向性をリードする存在になっているという見方もできる。

そこで受験生は自分の強みを発揮し、一方の私立中の側は、従来の4科目･2科目入試では測り切れなかった小学生の潜在的な資質や才能、伸びしろを見出して迎え入れることができれば、学校選び（受験校選び）という観点でも、とても良いマッチングができたことになる。

もちろん、多くの中学受験生にとっては、これまでに受験勉強をしてきた4科目･2科目の入試がメインの目標になることは変わりはない。しかし、もし「この入試ならば、自分の強みが生かせるかも？」と思える新タイプ入試を見つけたならば、併願作戦のなかで、そうした入試にチャレンジしてみることも、来春2020年入試で合格に近づく突破口になることも、最後に強調しておこう。

最新入試情報 | 2020年入試での入試要項変更ほか〈抜粋〉

来春2020年入試でも加速的に増加する入試日程・科目の変更

【日程・科目・定員　等（一部帰国情報含む）】

■巣鴨、入学手続き延長

巣鴨は2020年入試の入学手続締め切りを、従来の2月5日15:00から2月6日に変更することを決定。時刻など検討中で正式決定は11月。

■藤嶺学園藤沢、2月1日午後を得意科目選択型に

藤嶺学園藤沢は、2月1日午後を2科から得意2科目選択型Aに変更（国算、国社、国理、算社、算理のいずれかで受験）。2月3日午前は得意2科目選択型から2科4科選択②に変更。2月1日午前（2科4科選択）とのダブル受験は高いほうの得点で判定（いいとこ取り）する。（予定。正式決定は8月下旬）

■鷗友学園女子、試験時間変更

鷗友学園女子は、2020年入試より4科目の試験時間を、従来の各50分から各45分に短縮する。問題量は9割程度に軽減。試験終了は12:40から12:20に繰り上がる。「受験生にどの教科でも実力を発揮し、最後まで集中して取り組んでほしい」と4科目均等配点（各100点満点）・均等時間は変えず。

■大妻多摩、「国際進学クラス」新設

2020年度入学生より中2からの「国際進学クラス」を新設。2020年入試は、「総合進学入試」と「国際進学入試」を実施。「国際進学入試」は英語を導入する入試で30名募集。

■共立女子第二、サイエンス入試日程変更

共立女子第二は、サイエンス入試の日程を2月4日午後から2月1日午後に変更。

■国本女子、DDコース、LAコース募集

国本女子は、2020年より始まるDDコース、LAコース体制に向けた募集要項を決定。DDコースは、5回入試（2月1日午前・午後、2日午前、3日午前、5日午後）を設け、英語型、2科・4科型、グローバル思考型入試で実施。英語はα型（英語+面接）またはβ型（英語+国語・算数。国算1科選択も可）。グローバル思考型は英語筆記・日本語作文・アクティビティ。LAコースは4回（2月1日午前・午後、2日午前、3日午前）で、2科または4科。

■鎌倉女子大学、国際教養コース・プログレスコース募集

鎌倉女子大学は、2020年より国際教養コース・プログレスコース体制に。入試では、国際教養コースは2月1日午前・午後、2日午前・午後、3日午後、5日午後、10日午後の計7回。日程により4科、適性検査型（ともに英検による加点措置あり）のほか、全日程で受験可能な「書類重視型」も実施。2月5日と10日は特待生のみの合否判定を行う特待生入試。プログレスコースへのスライド合格あり。プログレスコースは2月1日午前・午後、2日午前・午後、3日午後の5回入試。全回2科。また帰国生入試（国際教養コース）を12月18日、2月10日に実施する。

■日本女子大学附属、当日WEB発表

日本女子大学附属は、2020年入試で、一般入試・帰国生入試とも、当日21:30（予定）に、WEBの個別ページで合格を発表する。

■横浜女学院、特別奨学生試験新設

横浜女学院は、2月1日午後と2月3日午後に特別奨学生試験を新設。2科、4科、英国、英算から選択。特待生A選抜で、入学金および3年間の授業料が免除される。

■浦和実業、適性検査入試第2回で適性検査Ⅲ実施

浦和実業学園は、第2回適性検査（1月19日実施）で、「適性検査Ⅰ:作文型、適性検査Ⅱ:科目複合型」に加え、「適性検査Ⅲ：数理志向型」を実施する。第1回適性検査（1月10日）は「適性検査Ⅰ:作文型、適性検査Ⅱ:科目複合型」で変わらず。

■開智、日程・定員比変更

開智は、第1回定員を80名から90名に変更。第2回を1月12日から15日（最終回）とし、40名から30名に。先端特待は1月11日30名募集で変らず、先端Aは14日50名から12日45名、先端Bは17日40名から13日45名に変更。第1回→先端特待→先端A→先端B→第2回という流れとなる。

鷗友学園女子は来春2020年入試から試験時間を短縮へ！

■かえつ有明、AL思考力入試日程変更

かえつ有明はアクティブラーニング思考力入試を、2月2日午前から3日午後に変更する。その2月2日午前には、英語（作文・筆記・面接）、日本語（作文・面接）で実施する国際生Honors/Advanced入試を実施。

■栄東、東大Ⅰは1月11日に変更

栄東は、東大Ⅰの日程を1月12日から11日に変更する。東大Ⅱ・B日程は入れ替える形で、東大Ⅱ16日、B日程18日とする。これによりA日程→東大Ⅰ→東大Ⅱ→B日程となる。

■昭和学院、「昭和イノベーション元年」

昭和学院の新コース募集が決定。中学の募集は、「インターナショナルアカデミーコース（IA）」「アドバンストアカデミーコース（AA）」「ジェネラルアカデミーコース(GA)」。中3進級時に「インターナショナルアカデミーコース(IA)」「トップグレードアカデミーコース（TA）」「アドバンストアカデミーコース（AA）」「アスリートアカデミーコース（AA）」「ジェネラルアカデミーコース（GA）」を選択する。

2020年入試では、インターナショナルアカデミー入試で英語入試を導入。1月20日は午後入試とする（14:30集合/15:00開始）。帰国生入試も導入する。

■明大明治、定員男女1：1

明治大学付属明治は、第1回男女計約90名、第2回男女計約60名から、第1回男子約45名・女子約45名、第2回男子約30名・女子約30名と男女1：1の募集定員。

■八千代松陰、適性検査の選択導入

八千代松陰は、1月21日入試を、「1科入試(国語・算数・英語より選択)」または「適性検査型入試」の選択とする。これまでは、2科(国語・算数)か3科(国語と算数は必須。理科・社会・英語より1教科選択)。

【共学化・体制変更・開校 等】

■芝浦工大、2021年より中学も共学化

芝浦工大附属が、2021年4月から共学化。2017年より共学化した高等学校とあわせて、芝浦工業大学と連携したSTEAM教育を強化する。

■神田女学園、アイルランドとダブルディプロマ

神田女学園は2020年4月より、「アイルランド ダブルディプロマ プログラム」をスタートさせる。留学先となる『Rockwell College』と合意。

■豊島岡女子学園、高校募集停止

豊島岡女子学園、2022年から高校募集停止する。2020（令和2)および2021年（令和3)年度の高校入学試験は従前通り90名募集で実施、中学募集は変更しない。

■日本工大駒場、高校の工業科系学科募集停止

日本工大駒場は、2021年より高校の工業科系学科の募集を停止（現中3が募集最終学年)。普通科専一校となる。　〔2019年7月30日現在〕